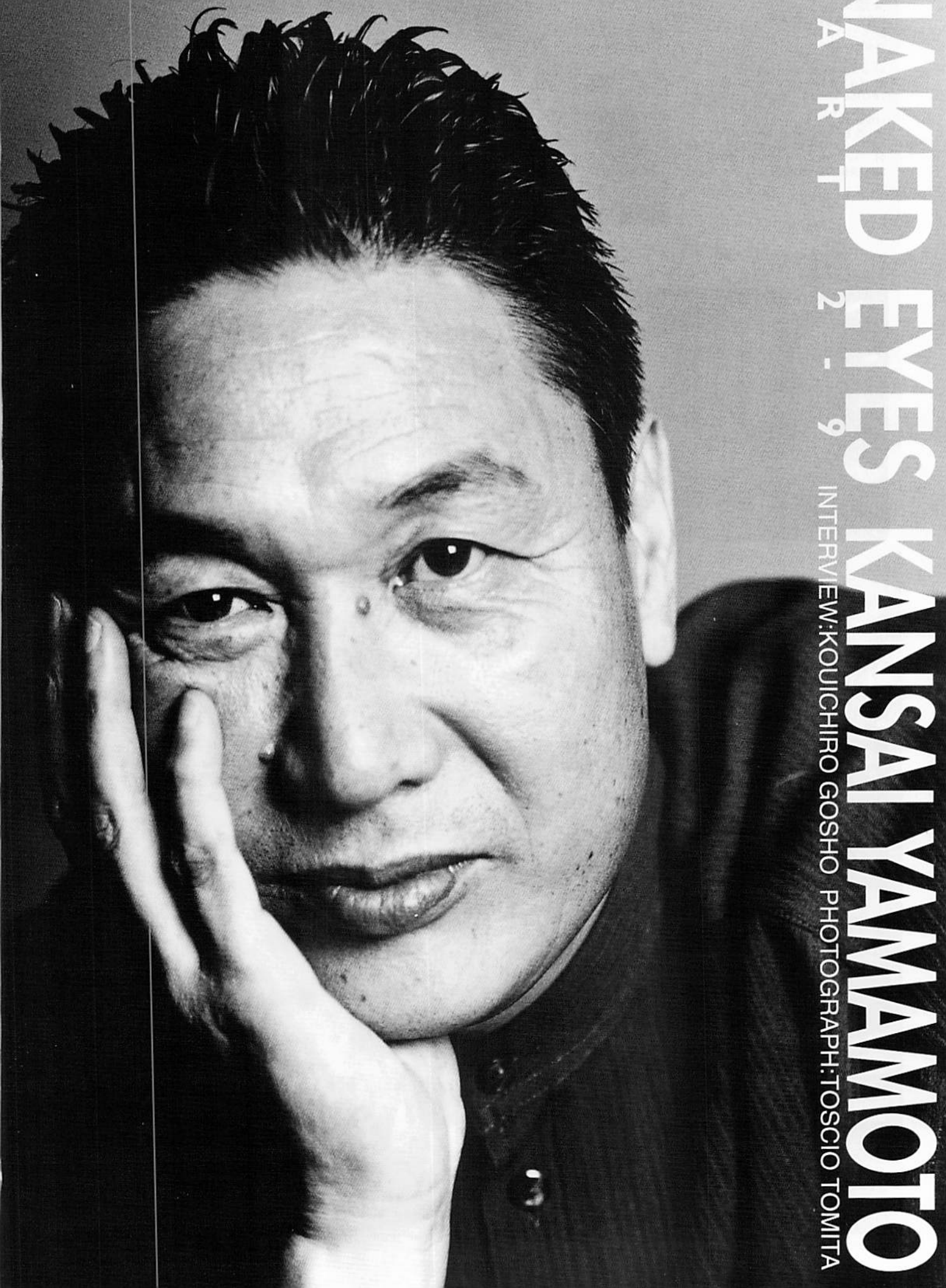


NAKED EYES KANSAI YAMAMOTO

INTERVIEW: KOUICHIRO GOSHO PHOTOGRAPH: TOSCIO TOMITA



山本

寛斎

必ず道はある。 THERE IS A WAY.

地球元氣衰 熟頭・感動仕掛家と肩書を掛け替えて貰いたくなる男であった。次から次へマクダマの如く噴射し続ける寛斎に一時停止という単語さえないのだから。幾度となく驚きと感動を覚えさせてくれた彼は、神は前進という運命を背負わせたのであろうか。取り付かれたかのように世界を巡り、奇想天外な独自のショーアップを展開している。それは単なる服飾というファッションシーンやショーイヴェントの世界への刺激を超越している。つまり地球上に生ずる人々の元氣に火をつけ、触発震憾しているのである。

一九六四年二〇歳で大学を中退したヒッピー世代の彼は独学でデザインを学び三年後「装苑賞」を受賞、その四年後法人設立を為した。七一年日本人デザイナーとして初めてロンドンでファッションショーを開催。後年パリコレ・NYコレクションにも参加。デヴィッドボウイのコスチュームを担当する等、誰もが知るところである。

彼のイヴェントヒストリーを眺めてみると当然のことであるがその時代での新しい大胆な試みが必要行われている。そしてそれは他のデザイナーに比類なく「初めて」「最初」「先駆け」であって、その後のショーイヴェントの定番モデルとなっていくのに気付かされる。静々のウォーキングがリズムカルに、そしてタンキングスタイルになったのも、ロックミュージックの取り込みも、和太鼓や邦楽、更にはお祭り等風物フュージョンも、砂の滝等に代表されるミニジウムスタイルも、レーザー、照明を多様駆使したスベクタクルスタイルも、等々これ程の共感複合表現は彼自身の内なるものの露出表現であり、大衆を活性化させている。

九三年「ハロー！ロシヤ」九五年「ハロー！！ベトナム」のスーパーイヴェントはその集大成ともいえる。

言葉の通じない社会主義国の観客のエネルギーをハワフルでエキサイティングな反応は紛れもなく正直な評価であろう。単にファッションデザイナーに留まらず、ショーイヴェントプロデューサーに傾く片鱗は七二年頃より伺える。その源は観客とのコラボレーションであり、「元氣主義の元氣の素が加速させたのだらう。ショーイヴェントのコピーは誹言しているかの様である。『晴梅ハッションナイツ』『大寛斎祭』『寛斎元氣主義』『心エネルギー』『行くぞっ』『WAOH!』」

■ 次々と新境地に挑戦し、難関を越え実現している。羨ましい限りだ。

勿論大きな失敗も幾つもあったけど、人生に勝ちつつあるのじゃないかと思っている。まさに達成しているとは思いませんけど、やりたいことにエネルギーが傾けられていることは事実だから。

要するに私が人生で何を勝つかというと「やりたいことをやるんだ」という点ですな。

■ 失敗した時、敗けた時でも元氣印を持ち続けている。どのように克服しているのか。そんな時のヒトコトを。

「THERE IS A WAY」私は「必ず道はある。」と解釈しているんですよ。何の制約、義務も置いとせず、あつからんとして非常にいいなあ。詰まった時に使えるなあって感じですね。

■ 好き嫌いがはっきりしている様だけど、最近は何とも嗜みないとか。

仕事の上では好き嫌いをハッキリするけど私生活では気に入らぬことは笑ってまよよ。つまり黙認ですね。存在を認めてないという事です。だから怒鳴りつけるとか無くなった。……おこれない自分がみたくないか？……決定的に重要なことと言いますけど、カリカリしてるとは此細なところが多いです。その延長で叱つてもその人が影響を受けるとは思わないから、無駄なことは止めておすよ。

■ ところで、破けた洗いざらしのジーンズは貧乏の証なのか、格好良きの象徴なのか。

多くの国の誰でもがジーンズをはいているんだけど、先進国ではその良さは認知されている。が、そもそもデザインっていうのは、人類が幸福を求めて生き続ける限りデザインの行為は続くものだと思ってる。いつの時代も次世代の人達は「新しい価値観がある。」で成長してきますから、新しい価値観とともにデザインもどんどん進化します。私達が等しく歳とって次の世代が出てくるから、まるで価値観が違うものが生まれてくるのは理の当然であり本能であります。そういう意味でジーンズも何の象徴であるかは変遷し続けるだらう。

■ デザインが進化しても、たかがファッション・ショーイヴェントで何ができるのか。

人間が集まれば騒動も起こせる。新しいエネルギー、元氣が生まれる。「人が前へ前へ進むことは素晴らしい。」というところに其鳴した人々は、表現された価値観に自覚め生きることを求め、幸福を感じたろう。人間讃歌そのものだ。

ノスタルジックに浸る大人達の多い中、新しい時代を生む胎動を描き振り起こすエネルギーを感じる新鮮さを感じた。人懐っこい残る笑みは大器の余裕が為せる業である。対面している人間臭い温かみとハレの輝きが伝わってくる。きつと祭り好きは遠くない。

ベトナムの少数民族の娘は寛斎に「おんなを報じられている。あたしは貧しいけれど、あなたと逢える幸せです。」

筆者も伝えた。……「祭りの晩に二献酌交しよ。」

(敬称略) 文・五所光一郎
写真・富田敏夫